

北海道開拓の村 冬の生活体験

冬の生活道具

《人力橇(じんりきそり)》



明治期から昭和初期にかけて、北海道に限らず全国各地において人力車が用いられていたことはよく知られている。雪の降る北海道では、冬になると人力車にかわって人力橇が使われた。主に都市(市街地)で利用され、大正後期には道内だけで約千台にも達していたが、昭和に入ると減少した。

本州の人力橇は箱形のものが多いが、北海道ではロシア型橇を改良したものに、人の座るイスや人力車の上部を載せたものが多い。また、雪の降る時は幌を利用し、防寒用の赤ゲットで下半身を覆(おお)うことがあった。この橇は病院やホテルなども所用していたが、専門の車夫(しゃふ)の曳(ひ)く営業用のものが多い。

《除雪道具 (ジョンバ、雪搔(ゆきかき)》

北海道の除雪道具は、雪をすくうヘラ状の板に別材の柄を取り付けて製作されるものが一般的で、ジョンバ、雪搔きなどと呼ばれていた。ジョンバは北海道の方言であるが、その語源は不明である。

ヘラの部分が凹状になった雪搔きは、旧国鉄構内の除雪に使われていたもので、きれいに遠くへ雪を投げ捨てる事が出来るよう工夫されており、一般家庭にも広まった。また、ヘラの部分を竹で編み先端部を鉄板で補強した「竹ジョンバ」は、主に新雪の除雪などに使用された。



(写真左:竹ジョンバ 中央:ジョンバ 右:雪搔き)

《カンジキ》

雪の上を歩くとき、足が雪に踏み込まないようにクツやワラグツの下に履いたカンジキは、明治から昭和初期まで広く利用されていた。また、山陰地方から北海道まで広い範囲で使われ、本州でも雪の多い地域で古くから使用されていた。

カンジキは、ユキワ、スカリ、ワカンジキなどと呼ばれ、形状では、一本の木・竹で組んだ円形の単輪型(たんわけい)、前輪と後輪を組み合わせる複輪型(ふくわけい)、主に竹を横並びに組み合わせるすだれ編型、木をひょうたんの形に組むひょうたん型など、雪質や気温差、用途により様々な形態がある。



参考資料：○北海道の民具（北海道開拓記念館・監修、大久保一良・画、北海道新聞社）

○わら細工と冬の衣装（2005 北海道開拓の村道庁ロビー展）

○北海道開拓記念館第20回特別展・雪と氷と人間(目録)、第46回特別展・雪と寒さと文化(目録)

冬の生活体験②【製作：北海道歴史文化財団 2016.12】